〔 研究区分： 学内共同プロジェクト研究 〕

研究テーマ：	教職員による学生への効果的なメンタルヘルス対応モデルの検討 ～ 学生相談マニュアル作成を目指して～	
研究代表者：	総合教育センター　准教授・金山 健一	連絡先：kanayama@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：	教授・藤巻 康一郎，　教授・藤田 泉，　教授・中瀬古 哲， 教授・遠藤 伸治，　准教授・塩川 満久	

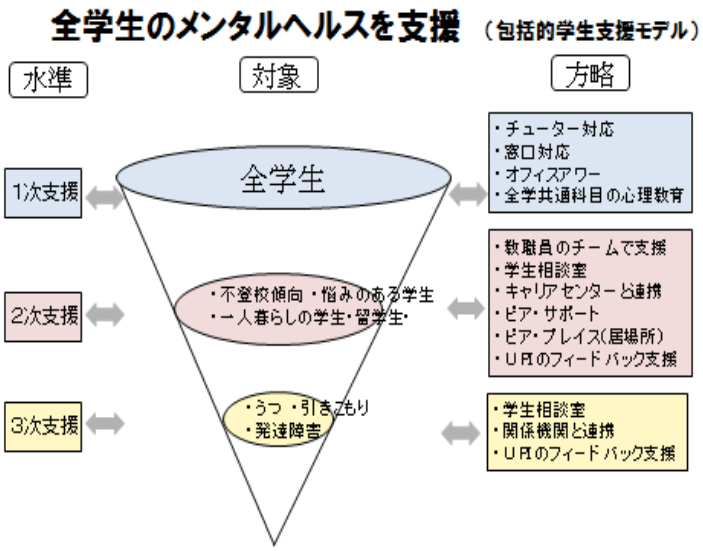
【研究概要】
大学では、不登校、引きこもり、うつ病、発達障害、自殺念慮など心の問題を持つ学生が増加し、相談内容も深刻化・多様化している。研究目的は、UPI（心の健康調査）（University Personality Inventory）で学生のメンタルヘルスを分析し、学生対応で苦慮したケースを調査し、効果的な学生支援の在り方を検討した。成果としては、UPI の分析から、キャンパス差、学年差、性差が明確になり、事例研究からは深刻な学生の問題は、家庭要因、生育歴の要因の影響を受けていることが判明した。学生支援には UPI を活用した問題の早期発見とチーム支援が必要である。

1 研究の背景

大学では、心の問題を持つ学生が増加し、問題・課題も多様化・深刻化している。多くの大学で発達障害の学生への対応は苦戦している。2004 年に発達障害者支援法が公布され、大学では「発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮をする」と明記された。しかし、9 年が経過してもなお、現状の取組は十分とは言い難い。大学生の自殺対策ガイドライン（2010）、学生の健康白書（2005）では、大学生の死因の第 1 位は自殺であり、その 8 割は保健管理センターなどの相談機関を利用することなく死に至っている。その対策として早期発見の一助となる UPI、予防としてピア・サポートが有効であると明記されている。

2 研究目的

本研究の目的は、UPI を活用した教職員による学生への効果的なメンタルヘルス対応モデルの検討である。スクリーニング・テストの実施率は、国立大学で 80.7％（国立大学精神健康実施調査，2007）で、スクリーニング・テストのうち UPI を実施している大学は 69.4％（全国大学メンタルヘルス研究会,2011）である。UPI では、精神疾患全般、統合失調症、抑うつ状態、神経症、自殺群・自殺念慮群等をある程度スクリーニングできる。全学生に対して UPI を活用した入学から卒業までの包括的支援モデルを検討する。



3 研究内容

① 3 地区、大学生合計 2,160 人を対象にした UPI を分析し、学生のメンタルヘルスを検討した。
② 調査対象とした 165 事例の分析と対応方法を検討した。
③ 本研究を踏まえ、学生相談マニュアルを作成し学生支援に寄与する。

4 研究成果

〔 研究区分： 学内共同プロジェクト研究 〕

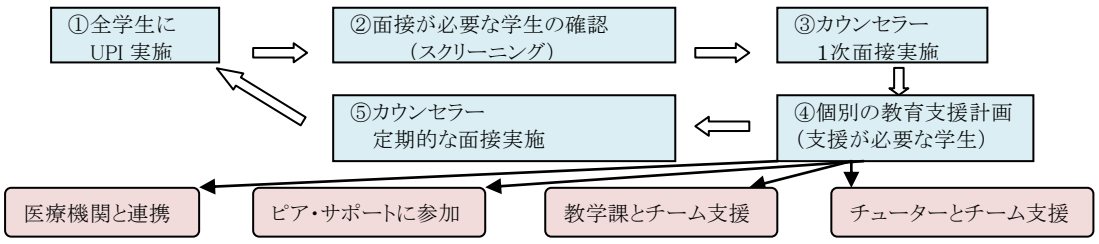
(1) UPI分析の成果

UPIの調査結果で、精神科・心療内科受診経験率、不登校経験率、自殺念慮学生、相談希望学生率、不適応学生「UPI 得点30点以上」の地区差、学年差、性差を分析した。3つの地区別（A～C）の比較では、精神科・心療内科受診経験率、不登校経験率、自殺念慮学生では、地区別に有意差はなく、各地区に問題を抱える学生がいることが判明した。学生相談室希望学生はC地区が有意に少なく、UPI30 点以上（不適応学生）はA地区が有意に多いことが判明した。学年差では、学生相談室希望者、UPI30 点以上（不適応学生）は、1年生に有意に多く、性差では不登校経験者、自殺念慮の学生は男子に多く、学生相談室相談希望者は女子に有意に多いことが判明した。UPI 下位尺度の心気症、自律神経、抑うつ、劣等感、神経症、対人症状の各得点では、A地区が有意に高く、学年差は1年生が有意に高く、性差では女子が有意に高かった。研究では、地区別、学年別、性差の特徴を踏まえた対応方法をまとめた。

(2) 事例研究の成果

UPI の結果を踏まえ、不登校、引きこもり、うつ病・うつ状態、発達障害、摂食障害、自殺未遂、自傷行為、DV、学業不適応、家庭生活不適応、大学生活不適応の165事例を分析し、UPIを活用した支援システムの構築し、学生相談マニュアルを作成している。

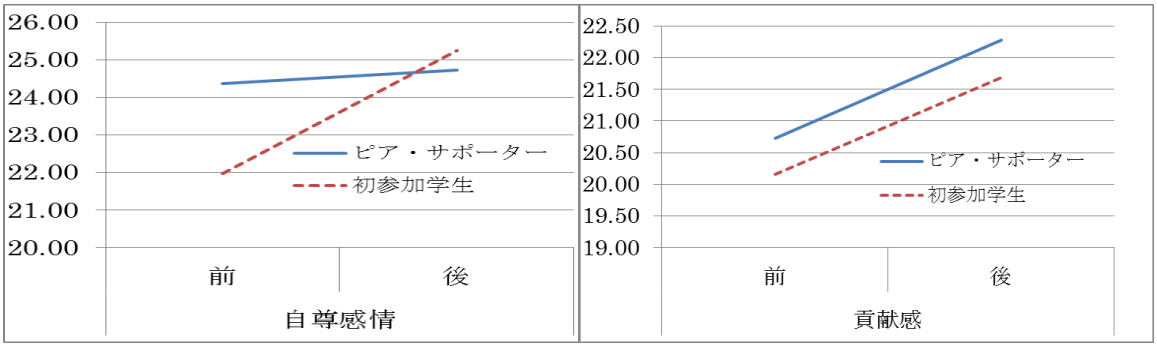
UPIを活用した支援システムの構築



①UPI を全学生に実施し、その結果から、②要面接者のスクリーニングをし、不適応学生に対して、③臨床心理士が面接を実施する。必要に応じて、④個別の教育支援計画を策定し連携を図る。⑤定期的な臨床心理士による面接を継続する。次年度の4月に再び①UPIを実施しその変容を分析する。

(3) ピア・サポートの成果

学生が学生同士を支え合うピア・サポートは、国立大学では 57.1％実施（日本学生支援機構,2110）されている。ピア・サポート研修に参加した学生に対して、自尊感情尺度（RSES）で自尊感情、共同体感覚尺度で、所属・信頼感、自己受容、貢献感を測定した。研修初参加学生の「自尊感情」「所属感・信頼感」「自己受容」「貢献感」得点は、研修前後で全項目が上昇し有意差が認められていた。ピア・サポート研修に、学生が参加することが学生支援で有効であることが判明した。



(4) 学会発表等

学生支援の強化・充実は、「独立行政法人大学評価・学位授与機構による評価報告書」「大学の中期目標・中期計画」にも明記されている。本研究は、日本学校心理士会、日本学生相談学会で発表する予定である。